2.日銀時代

十勝岳(30)

1966 年大学を卒業して日銀に就職した。日銀では新入行員に対し、入行 3 ヶ月後の 7 月から 3 年間地方の支店に勤務させる慣行があり、小生は札幌支店に配属された。札幌支店には山好きの人が何人かいて、スキーや山歩きが結構盛んだった。その中に本格的に山を歩いている人が、北大の人を中心とする山の会を紹介してくれた。

山の会では、毎年正月に十勝岳に登って山スキーを楽しむことを恒例としていた。札幌での 2 年目の正月は無理を言って日高のペテガリ岳登山に代えてもらったが 1 年目と 3 年目の 2 回は正月の十勝岳登山に出掛けた。

本州の冬山は、ワッパとアイゼンだが、北海道では山用のスキーにシールを付けて登るのが当たり前。アザラシの本革のシールに初めてお目にかかり、スキーが登るための道具だと知った。山スキー自体が初めての経験なので、はじめはストックを股の間に挟み込んでブレーキをかけながら直滑降するか、斜滑降キックターンの繰り返しだった。

そんなスキーの腕前でも、天気の良い日を見つけて何とか十勝岳の本峰に登ることができた。途中のスノーモンスターが見事だったこと、幸運にも美瑛岳まで足を伸ばせたことは僥倖としか言いようがない。札幌 3 年目の十勝は天気が悪くて散々だっただけに、1 年目の十勝岳が忘れられない。

蔵王山、妙高山、巻機山(33)

3 年間の札幌勤務を終えて東京に戻ってもしばらくはスキーにはまった。蔵王はゲレンデスキーの延長で頂上まで行けるし、深田久弥の言うように「群雄並立といった感じで、その群雄を圧してそびえたつ盟主がない」ので、蔵王山の頂上に立ったという実感がない。

妙高と巻機は、まだ残雪のたっぷりと残る春山として登った。

妙高では温泉に泊まったので、宿に帰れば温泉と食事が待っている。初めて優雅な日帰り登山を経験した。

一方、巻機の宿舎は清水部落の古い大きな農家の民宿。囲炉裏と炬燵はあったが火に面していない背中は寒い。山登りとしては、急登や危険な岩場はなく難しい山ではないが、とにかく長い。たっぷり一日がかりの登山だった。

雲取山(34)

長男が小学生になったので、登山の指南をすることにした。行き先は東京に住んでいるから東京で一番高い山、雲取山にきめた。

雲取山はアプローチが結構長い。奥多摩駅からバスで丹波まではいり、後山林道を登ってやっと三条の湯の小屋に着く。ここで一泊した後も頂上まで4時間近くかかる。下りも日原に下りても5～6時間はかかる。ここに小学生を連れていったので、息子は下りに具合が悪くなってしまった。これは小生の明らかな判断ミス。以後反省を込めて雲取山には登っていない。

乗鞍岳(35)

我が家には 4 人の子供がいるので、夏休みにはどこかに連れて行かなければ済まない。大体安直な海か湖で済ませていたが、ある時、小生は中学生で初めて薪をたいて飯を作ったことを思い出した。この生きるための基本を早く経験させたいと思って、小学生の子供達を上高地・小梨平に連れて行った。自分たちで作った飯はうまいけれど、薪が不完全燃焼すれば煙が出て、目が痛くなるほどけむいことも体験させた。

ちょっと苦労させたので高くてきれいな山も経験させたいと思って、帰りに乗鞍岳に連れて行った。昭和50年代にはまだ畳平までマイカーを乗り入れることができた。幸いに天気にも恵まれ、コロナ観測所や頂上までハイキング並みの登山で標高3000mを一応経験させることができた。

草津白根山(36)

娘がイタリアに嫁ぐことになった時、日本を発つ前に如何にも日本らしい温泉に行きたいという。選んだのが草津温泉。草津温泉とワンセットで草津白根山に登った。この山について深田久弥は「周囲の山が黒々と樹林におおわれているのに」この山だけが火山で焼けた山肌を露出して、「その異様なコントラストは、ますます日本離れのしたユニークな風景を呈している」と表現している。

だが、この光景は日本のいろいろなところで見られるようになり、それほど珍しい光景ではなくなったように思う。道路が整備されどこにでもマイカーで行ける時代では観光地の一郭に過ぎないような気がする。この山も、今、百名山を選ぶとしたら、当選するかどうかあやしいと思う。

宮ノ浦岳、石鎚山(38)

1991年4月、どうも転勤らしい。地方の支店に異動することはまず間違いない、と感じた。山好きで気心の知れた友人に話すと、「発令されたらしばらくは山に行けないでしょう。転勤前に思い切った山に行きましょう」という反応。早速神田の赤ちょうちんで相談して、九州で一番高い山・宮ノ浦岳と四国で一番高い山・石鎚山に登る事にした。タイミングはゴールデンウィーク明け。時間を節約するため、往路東京から屋久島間と鹿児島から松山間は飛行機を使うこ

とにした。山登りに飛行機を使うなんて初めての経験だった。
　屋久島の安房から淀川登山口まではバス。登山口から宮ノ浦岳頂上は 6 時間くらいのアルバイトだと思うが、すさまじい雨だった。深田久弥も「俗に屋久島は『ひと月に三十五日雨が降る』とさえ言われている」と書いているので雨が多いことは承知していたが、とにかくすさまじい。登山道は水路となってとうとうと流れている。この雨が縄文杉のような神と化したような杉を育てているのだ。
　大雨の頂上を越えて、石楠花のきれいな道を下り、高塚の避難小屋に着いた時には、小生は全身びしょ濡れ。これに対し、最新の雨具を使った友人は平気な顔をしている。この時小生もゴアテックスの雨具を買おうと心に決めた。
　翌日はどうやら雨も上がり、縄文杉やウィルソン株を見物しながら下山。延々と続くトロッコ道は枕木と歩幅を合わせるのに苦労したが、無事に安房まで下ることができた。
　登山計画では 1 日の予備日をみていたので、鹿児島には早く渡ってこの予備日を温泉と焼酎に使ってから予定通り松山に飛んだ。
　松山から石鎚山に行くバスがないわけではないが、時間の節約のためタクシーを使った。松山から面河渓を通って標高 1500m くらいまで車で行ける。あとは 4～500m 登れば頂上である。天狗岳の岩場は若干緊張するが、身の危険を感じるほどではない。
　下りは西条側のノーマルルートを使った。松山からタクシーを使って時間を節約したので、岡山には明るいうちに着けた。
　岡山の駅で新幹線に乗るまでの間、街を見ながら 2 つの百名山を登れた喜びをかみしめていた。この 2 週間後、期せずして転勤の赴任先はこの岡山。同じ駅に降り立った。

大山(39)
　岡山に赴任しても、この県に百名山はない。最も近いのが鳥取県の大山である。
　大山には二つの顔がある。一つの顔は、西側伯耆町から見る大山。富士山のミニチュア版である。出雲富士と呼ばれて不自然ではない。鳥取県にある山なのに、見る場所の"出雲"という島根県の名前がついているところが面白い。
　もう一つの顔は、日本海側。すなわち北側から見た大山は長く連なる岩山を描いた屏風である。充分横に連なっている。岩山は大きく崩れており頂上も崩落の危険から立ち入り禁止だ。登山口には石が大きく積まれており登山者は一人一つ頂上近くまでこれを運び上げている。

3. 岡崎信用金庫時代

木曽駒ケ岳(40)

52 歳で日銀を退職し、愛知県岡崎市の岡崎信用金庫に転職した。地縁も人縁もない。仕事の関係では否応なしに人脈がつくれるが、仕事以外のフランクな人脈づくりにはそれなりの努力が必要だ。これには同年のいわゆる同期会にゲストとして出席し自己紹介をさせてもらった。ここで山の話をして同好の友を募ってみた。

多くの人が富士山に登りたいと言っていたが、体力、経験を聞いてみると、いきなり富士山は無理。ロープウェイを使えば標高 2600m まで歩かずに登れる木曽駒ケ岳を提案してみた。こうして 1995 年の夏、20 人ほどが千畳敷から木曽駒に登ることとなった。

千畳敷カールから宝剣岳を指差して「あそこまで登ればビールが飲める」と冗談で言ったら、本気にされて後でさんざんに恨まれた。それくらい経験の乏しい仲間だった。

富士山(41)

木曽駒に登った仲間のうち 2～3 人が是非とも富士山に登りたいという。体力的には問題がないようなので富士山に案内することにした。

1 日中ガスに包まれ決してハッピーな登山ではなかったが、日本一高い山に登れたことを喜んでくれた。以後この人たちを核にして富士登山の輪が広がり、かつ長く続いており今でも毎年富士登山を続けている。岡崎信用金庫のお取引先の方からもお声がかかるようになり、多い時にはひと夏に 3 回も富士山に登った。

通算すると何十回も登っていると思うが、同行者の最年少は幼稚園の年長組にいた時の娘だ。最高齢は 80 歳近いお取引先の社長だと思う。人数も、コンピューターで取引のあった日立製作所の社員も含め 30 人にも膨らんだ時もあった。

何十回にもなる山行の思い出を書いていたらきりがないが、一つだけ書くとすれば、千歳高校山岳部 OB での 1970 年正月元旦の登頂だろう。

前日の大晦日に当時の富士吉田駅からタクシーでスバルラインの二合目まで行き、あとはスバルラインを外れ夏道を歩いて、五合目で幕営。食事の後、天気予報を聞こうとラジオをつけたら、ニュースをやっていた。日銀のお札の年末発行高のニュースだった。自分の勤め先の話なので真剣に聞いていたら、どうも聞き覚えのある声だった。あとで確認すると放送局に入ったばかりの弟の第一声だった。まさに奇遇である。

翌日の元旦は、晴れてはいなかったが行動には差し支えはなかった。最初は吉田の大沢を登り始め、途中から夏道のある尾根にとりついた。頂上部では強

烈な風とツルンツルンの青氷に苦しめられた。登りはまだ良かったが、下りが怖い。アイゼンがまともにきかない。一発間違えば五合目まで一直線で滑落である。何事もなく天幕までたどり着けた時は精神的に疲れ切っていた。

もう一つ富士山と弟を結び付けることがあった。2013 年、病を得ていた弟の重篤のメールを富士山の頂上で受けた。山ではいつも携帯電話の電源を切っているが、この時に限って何気なく頂上で電源を入れると、女房から弟の重篤を知らせるメールが入っていた。土曜日の昼頃だったので登る客が列をなしている中を懸命に急いで下山。五合目まで 2 時間で下れた。富士山の因縁である。

正月の富士山を経験したあと、30 歳台に入って家族持ちになったら本格的な冬山登山はそろそろ止めようと思うようになった。これより前に、丹沢で岩から落ちて背骨と右手に怪我をして、小生の体格は岩登りには向いていないことを実感。岩登りをやめていたので、30 歳台からはピークハンターに専念する決心がついた。

恵那山(42)

登山というスポーツは家族や職場の同僚の見えないところでやる運動だし、遭難事故は人の生死が絡むので大きく報道される。したがって登山を知らない人はやたらと危険視してしまう。職場の上司は、「山に行く」と言えば不安な顔をするから岡崎信用金庫での登山は休日にやることにしていた。愛知県は高速道路が張り巡らされており休日の渋滞もほとんどないので、登る山は徐々に広がり有名銘柄・百名山にも手を広げていった。

木曽駒に続いて登ったのは恵那山だったと思う。この山は冬になると名古屋から良く見えるし、中央高速道路には恵那山トンネルがあるので知名度は十分だ。皆さんまだ山の経験が浅い人が多いので、緩やかな樹林帯をゆっくり登ったのだが、天気が今一つで、バテた人も出てきた。恵那山は頂上部も樹木に覆われていて見晴らしが利かない。山登りの楽しさを味わってもらおうと思ったが、残念ながら失敗だったようだ。

御嶽(43)

東京に住んでいる人には御嶽の日帰りというのは考えにくいが、岡崎だと少しも難しくない。標高 2200m の田の原登山口までマイカーで 3 時間もかからない。田の原から頂上まで 3 時間くらいのアルバイトである。歩き始めてすぐに樹林帯を抜けるので、高山を歩く喜びを味わえる。2014 年にお昼時の噴火で大勢の方がなくなる大惨事が起きたが、大勢が簡単に登れるような山である。

ところで、同じ「御嶽」と書いて、東京・多摩では「みたけ」と呼ぶのに木曽

では「おんたけ」と呼んでいるが、これは「王の御嶽（おうのみたけ）」が「おんたけ」と呼ばれるようになったのだそうだ。
　御嶽信仰も少し変っている。人間は御嶽の大神（おおかみ）の指図で生を受け、現世で一生を送るが、死とともに霊魂となって御嶽の大神のもとに戻る。その戻るところを確定させるために、生きているうちに御嶽に霊魂碑を建てている。他の山では見られない光景だ。

大台ケ原山(44)
　三重県尾鷲は本州で一番雨量が多くて年間に 4000mm も降る。その東に位置する大台ケ原もさぞかし雨が多いと思うのだが、これまで 2 度か 3 度行っているが、雨にやられていない。
　大台ケ原から尾鷲はよく見えるが、大台ケ原に入るのは尾鷲からではなく、奈良から延々と山の中を南下してくるのだ。岡崎からマイカーで 1 日かかってしまう。したがって山を歩くのは翌日になるが、大台ケ原はもともと大平（おおだいら）と言われていたそうで、標高 1600m 位の高原。ここを一周しても 3 時間余りなので、山としてはごく易しい。車に乗っている時間の方がよほど長い。
　大台ケ原の名物は、立ったまま枯れて白骨化した白骨林と呼ばれる樹木であるが如何にも痛ましい。白骨化の原因は異常なまでに増えたニホンジカだとか、茂りすぎた笹だとか、伊勢湾台風の塩害だとか言われているが、確かなところ分からない。

大峰山(45)
　大峰山という名前の山はない。大峰山脈の総称だ。北は桜で有名な吉野山から南は熊野古道でも知られるようになった熊野本宮である。この間約 100km。修験者には奥駈道と呼ばれていた。今でもこの名前は残っている。
　岡崎の山仲間は、この奥駈道を縦走しようと誘ってきた。1 週間くらいかかりそうだし、なんといっても水の調達の問題が大きいのでこれは勘弁して貰い、大峰山脈で最も高くて代表的な山とされている八経ヶ岳に登ることにした。
　八経ヶ岳に最も近い行者還（ぎょうじゃがえり）トンネル西の駐車場までマイカーで乗り付けると小 1 時間で山脈の稜線である奥駈道に入れる。奥駈道には石柱や彫像がおかれ、普通の登山道とは一味違う。途中の弥山（みせん）では白装束の 20 人ほどが何やら宗教行事を行っており、日常とは違う世界に入り込んだ感じがした。
　大峰山には、いまだに女人禁制を続けている山上ヶ岳がある。ここの覗岩では先達が登山者に岸壁から身をのりださせ「親孝行するか」などと詰問する。こ

の光景はテレビでも放映されているが、この現場はまだ見ていない。山上ヶ岳は、一度は登ってみたい山である。

白山(46)

白山と言えば「加賀の白山」である。石川県で唯一の百名山であり、石川県側から入るものだと思っていた。だから東京から行くのは、東海道経由にしても上越経由にしても、すごく遠い山という先入観があった。

岡崎に住むと、岐阜県側からも登れる。車の便が良いので少し無理をすれば日帰り登山も可能だとのこと。地図を良く見てみると、登山口の標高は石川県側も岐阜県側も同じなので車に乗っている時間が短い分岐阜県側が手軽である。ただ、標高差は同じでも、石川県側の明るく整備された登山道と違って、岐阜県側は樹林帯の急坂で地味であり、登山者は少ない。

我々高年層は、日帰り登山は無理なので岐阜県側から登って室堂平に一泊した。翌朝好天のもとで日向ぼっこをしていたら、御前峰の斜面を熊がのそのそ歩いていた。我々との間には十分な距離があったので高みの見物を決め込んだ。

荒島岳(47)

深田久弥は石川県大聖寺の出身だが、中学は福井県の福井中学だし、お姉さんの嫁ぎ先が福井県の勝山だったそうだから、荒島岳はいわば故郷の山なのだ。

福井県にはもう一つ素晴らしい山、能郷白山という山があって深田久弥は百名山を「選ぶとしたら、能郷白山か、荒島岳か」迷ったようだ。結局荒島岳を選択したわけだが、両方の山に登っている山仲間の意見は美しさで能郷白山に軍配を上げている。標高も 1617m と荒島岳(1523m)より高い。

そうは言うものの、我々は百名山に選ばれた以上荒島岳に登らないわけにいかない。岡崎の仲間と荒島岳の麓の民宿で落ち合うこととして、東京からマイカーで松本、安房峠、高山、九頭竜湖を通って麓の勝原（かどはら）着いたが確かに遠かった。

しかし、もう一度福井に行って能郷白山に登りたい。

燧岳、至仏山(49)

尾瀬は本当に素晴らしいところだと思う。冬には尾瀬ヶ原が真っ白い大平原になり、春の雪解けの時は水芭蕉。夏はニッコウキスゲ。秋になると草紅葉。休む暇がない美しさだ。尾瀬ヶ原は花で埋まる素晴らしさだが、尾瀬沼の静かなたたずまいも気に入っている。

こんな尾瀬を岡崎の仲間にも見せたいと思って新幹線を乗り継ぎ、上毛高原駅からはジャンボタクシーを鳩待峠まで飛ばして明るいうちに竜宮小屋に入っ

た。
　尾瀬ヶ原を東西から挟む燧岳と至仏山ついて、深田久弥は「燧の颯爽として威厳のある形を厳父とすれば、至仏の悠揚とした軟らかみのある姿は、慈母にたとえられようか」と書いている。至言である。もう少し言わせてもらえば、尾瀬ヶ原の南の高台にあるアヤメ平からの眺めも素晴らしい。
　岡崎からくると、竜宮小屋に泊まり、２日目には燧岳、３日目は至仏山に登って鳩待峠から帰る。ちょっときついし交通費が高いが、誰からも文句が出ない。

４．リタイア後
　(１)日銀同期生
金峰山、瑞牆山(51)
　65 歳で岡崎信用金庫を退き、東京に戻った。東京に戻っても岡崎の仲間との山登りを続けていたが、日銀同期の 3 人でも山を歩き始め、秋の金峰山に出掛けた。増冨ラジウム鉱泉あたりから見事な紅葉で、この景色だけでも東京から出掛けた甲斐があった。
　若い頃なら、富士見平で泊まることもなく瑞牆あたりを登るところだが、リタイア組は「平日にゆっくり登る」特権が与えられているので、富士見平小屋で 1 泊。狙い通り宿泊客は我々３人だけ。こういうときはリタイアのありがたさを感じてしまう。
　翌日はまず金峰山に登った。大弛側の道路が整備されたためメインルートは大弛側になったようで、金峰山の頂上はほぼ満員の状態だった。
　天気は素晴らしく、ひと月前に噴火したばかりの御嶽はまだ噴煙を上げていたので躊躇なく黙とうした。
　富士見平小屋に連泊して瑞牆山に登った。この山は大きな岩がごろごろしている。その直径 5～10m もある大きな岩の基部にごく細い枝がはすかいに立てかけてある。それが 1 本や 2 本ではない。10 本以上も立てかけてある。何のためのものなのか、大きな岩が少しでも動けば小枝は折れるから岩が動いたことを察知するためなのか、あるいわ単なるいたずらか、おまじないか。理由は不明ながら奇妙な光景である。

　高妻山(52)
　百名山登頂達成が読めてきた昨年、高妻山登山を計画した。地味で相当手ごわそうなので誰もつきあってくれないと思っていたら、日銀同期の 2 人が一緒に登ろうという。とてもありがたかった。
　戸隠小舎に入るまでは天気が良かったが、登山当日は朝からひどい雨。

高妻山の登山ルートは 2 本あり、戸隠牧場から一不動に登る従前からの登山道は、滝の脇を登っていくので鎖がついているとはいえ濡れた岩は滑りやすい。我々は戸隠牧場から弥勒尾根を登って六弥勒に行く新しい登山道を選ぶことにした。こちらは雨の中で泥まみれになる可能性があるがやむを得ない。

頂上直下の最後の急登はきつかった。頂上部は「十阿弥陀」、「高妻山頂上」、その先に乙妻山の「十三虚空蔵」と続くが、ガスの中で全体像が見えない。小生は十阿弥陀で腰をおろしてしまったが、仲間からの励ましの声でなんとかあと数分歩いて高妻山頂上まで登ることができた。

下りは雨もどうやらやんだので、旧来のルート。すなわち一不動を経て滝の道を下る誘惑にかられたが、高齢者登山は安全第一。来た道を引き返した。

那須岳(53)

日銀同期生の山仲間に奥方も交えた山行が楽しかった。その初回が那須岳だった。

マイカーを山麓駅に駐車して、ロープウェイで茶臼岳に登った。頂上からは朝日岳、三本槍岳に続く稜線がきれいに見えた。深田久弥はこの三山を「茶臼は名の通りコニーデであり朝日が峨々とした岩の盛り上がり」、「三本槍は(中略)なだらかな頂を持っている」と表現するように三山三様のかたちをしているのが面白い。

ちなみに、三本槍が形に似合わず厳しい名前がついているのは、この頂きに下野、磐城、岩城の三国の武将が槍を持って集まり、国境を確定しあったことに由来するそうだ。

三本槍からの帰路、午後 3 時になると南の方から雷鳴が聞こえてくる。気圧も急落したので気が気ではなかった。昔、大学時代に冬の那須で強風に痛めつけられたことを思い出してしまったが、今度は雷にも雨にもやられずにマイカーにたどり着けた。

鳥海山(54)

鳥海山に最初に登ったのは 12 年の 10 月末。この時はみぞれの中で道が分からなくなり、七五三掛（しめかけ）の手前で引き返さざるを得なかった。2 回目はその翌年の 10 月の半ばに女房と登ったが、直前の台風の後の強い寒波で台風の時に降った雨が凍りつき、ハイマツが針のように痛かった。それでも何とか登頂はしたものの良い思い出ではなかった。

そこで 14 年には、3 度目の正直と花の咲く 7 月に奥方同伴で登った。この登山は素晴らしかった。お花畑では、ハクサンイチゲ、チングルマ、ニッコウキスゲ等々高山植物の花盛りだった。天気こそすっきりせず眺望はきかなかった

が、七高山と新山の両方に登ることもできた。
　下りは千蛇谷の雪渓を使ったが、たまたま尾根筋から石雪崩が発生。我々は十分な距離はなれていたので危険を感じることなく、スケールの大きい自然現象を目の当たりにできた。
　最初の鳥海登山の時道を失ったが、あとで検証してみると正面から強いみぞれが吹きつける中で、顔を左に振ってしまい左側にあった踏み跡に迷い込んだことが分かった。反省。

苗場山(55)
　鳥海に続き、15 年にはやはり奥方同伴で苗場山に出掛けた。登山ルートとしては秘境中の秘境といわれる秋山郷から入ることにした。このルートは湯沢から神楽ヶ峰を通るいわゆる表ルートよりなだらかで歩きやすい。宿はネットで検索したら「えーのかみ」というのが出てきた。名前がユニークなので何かハプニングがあるかもと思ってここに決めた。
　宿の奥さんが期待にこたえて素晴らしかった。幅広い経験の持ち主で、機知に富んでいる。2 日目の夕食は宿のご夫妻も一緒になって楽しい宴席になった。料理の腕は確かで 2 日間とも山菜料理だったが、同じ料理は出てこない。その上お米まですべて自家栽培とのこと。ほとほと感心させられた。
　肝心の山登りは、表ルートの神楽ヶ峰越えのようなきつさもなく、広大な山上湿原をたっぷり楽しめた山旅だった。